九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鶏口と熊本

西田, 耕三
近畿大学教授

https://doi.org/10.15017/4741985

出版情報：雅俗. 10, pp.95-105, 2003-02-25. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

鶏口と熊本

西田耕三

江戸座存義側獅子眠鶏口（一七二一―一八〇二）は、熊本藩主細川重賢の俳諧に一座した宗匠たちの中でも、とりわけ重賢と親しく、安永九年（一七八〇）には、重賢に従って熊本まで行き、翌年二月、熊本往生院に芭蕉塚（木槿塚）を建てている。鶏口追善集『ふるうちは』の「河上菴泰里」（二世存義）序（享和二年）の、はじめの方を引いておこう。

茲に東都の正風獅子眠鶏口老人は、蕉門四世にして（芭蕉翁より、敬雨・楼川・鶏口とつゞけり）、俳諧を業として世に在りし事、凡六十余年なりとぞ。もとより山水の僻、他にこえたりしが、旅笠に杖を曳の時いたり侍らず、徒らに齢を過侍りしに、天明はじめの頃、ある君に具せられ侍りて、京の花、難波わたり、須磨明石の月、ところ〴〵の勝をさぐりて、行々肥陽熊本にいたれば、其君のおほむいさをしにて、あるとある隈々を尋、又あるときは、ひとり海浜にさまよひ、笘の小舟に千鳥を聞て腸の氷る夜も有けむ。果は長崎の浦まで見せさせたまふける有がたさ、実にも生涯のさちといふべし。六十余州に蕉翁の碑さはにありといへども、道ばたのむくげは馬にくはれけりちふ句かいつけたるはなし。此句こそ大悟とも又空蝉の世のはかなきをも衆生にしらしめ給ふなるべしとて、則木槿塚と名づけて熊本にたてられしは、かしこき大守の御ン時にあひ、獅子眠のめぼく、千とせの後も朽せぬ石に名の残るこそうれしけれ。（かっこ内は二行書。愛知県立大学図書館蔵、ただし国文学研究資料館マイクロ資料による）

一国の藩主のはからいによって「山水の僻」を満足させ、芭蕉碑を建立して名を残したことは、たしかに一介の俳諧師にとって、生涯の面目であったはずである。しかし本稿では、藩主との交流そのものではなく、その交流の余波とでもいった

事柄について、いささか報告しておきたい。

一　南渚

『ふるうちは』は、鶏口の門葉として、楼堤、鞭亀、雀角、志成、来峰、魯鶏、反斎、鶏觜、丹山、如圭、一馬とならべて、南渚をあげている。南渚とは誰か。熊本藩士の溝口政勝である。溝口政勝の俳名が南渚であると記す『肥後先哲偉蹟』後篇巻二「溝口孤雲」の項によれば、政勝は、「安永五年九月二千八百石拝領中着座、天明元年十二月御用人、寛政元年三月御番頭、六年九月御備頭、享和二年十一月大御目附、若殿様御守役兼帯、文化元年十一月御備頭、六年正月病願御免、十一年八月隠居」であったらしい。熊本藩政の中枢にいた人である。ちなみに、溝口孤雲は幕末期に活躍した人で、南渚の実子（系図では二代あと）である。南渚は、後述の資料によって、宝暦二年（一七五二）生まれと推定できるから、鶏口より三十一歳年少ということになる。

南渚は重賢俳諧にも一座している。出水叢書13『俳諧集』（汲古書院刊）によれば、天明二年（一七八二）七月七日が最初で、それから二年間ほど出席している。天明二年七月は、南渚三十一歳で、前年の十二月に御用人となったばかりである。御用人になったことと重賢俳諧に一座するようになったことと、おそらく関係はあるだろう。ただ、鶏口との関係はそれ以前から始まっていたようである。

鶏口と南渚の関係を示すのは、寛政五年（一七九三）序跋をもつ俳書『船のみち』である。『船のみち』は、南渚・鶏語・鶏口三吟歌仙三巻、南渚・鶏語両吟歌仙二巻、鶏語の発句による南渚独吟歌仙一巻、鶏口門人あるいは関係者の発句から成っている。序は鶏口、跋は鶏語である。鶏口序を引いてみる。

沙鴎観は東肥熊本の壮士たり。安永のころ、予かの地にまかりし時より睦み、その後君務ありて東都にとしをかさねて、雅をかたり、いさゝかへだてなかりしが、帰郷のときいふていはく、遠きをとをきとせるはたゞごとなり、海山をへだ

つともこゝろのゆきかひせるは、かはる事あらじ。千里の行程も一歩よりとあれば、発句をなし綴りて歌仙にせむとちぎりてより、便ごとにやりつとりつせしほどに、いつかまき〳〵調ひぬ。句を練てよきをなさむとにもあらず。つての急なる時はせうそこもなく、是をもてかたみに無事を訪ふのみなりき。ゆきゝの程おもひはかれば、数千里なれども、たがひにかよふこゝろづかひ、いさゝか是を遠しとせず。ことしの花はいかに、月は雪はと、訪ひとはるゝぞ、おりふしのたのみなりける。おなじしらべの鶏語てふ人、去年肥陽に往て、其事かのことかたりなぐさみしよし、俳諧もなせしと土産に贈らるゝ。これもおもしろく、もらしがたくて、ひとつにあはせていさゝかの冊子となす。（下略）

とし〳〵の塵つもりてや花の山

寛政癸丑春　　七十三叟
獅子眠鶏口

（国会図書館蔵）

沙鴎観は南渚のこと。鶏口が安永九年に熊本へ赴いてからの交流であることがわかる。細川重賢は天明五年になくなるから、その没後も交流は続いていたことになり、重賢俳諧を介してのみの関係ではなかったことになる。面白いのは、郵便を利用しての俳諧だった点である。鶏口・鶏語・南渚三吟歌仙三巻がそれにあたるのだろう。最初の巻の表六句をあげておく。

香はおなじ花いろ〳〵の菊ながら　南渚
　酔をすゝむる九日の節句　鶏語
挑灯も持たでむかひの宵月に　〃
　よく似た人と声かくるなり　鶏口
近頃は青みさめたる竹格子　〃
　小昼過ぎれば蝿の最中　渚

また、南渚・鶏語の両吟歌仙の発句には、それぞれ前書がある。最初の巻は「むさしの夏の月をもて留別をなし、今又つくしの夏月に再会を得て／此宿に待おほせたり夏の月　南渚」、次の巻は「年月の望なりて熊府に至り、はじめて沙鴎観へ

まかる／一しぼり暑さもつゝむ袂かな　鶏語」というもので、両者の関係がよくわかる。発句の部には、「文月半肥陽を立出るとて／又来むとしらぬ火またで別れけり」という鶏語の句が収録されている。さきの鶏口序の記述をあわせてみると、鶏語は、寛政四年（一七九二）の夏に熊本を訪れ、七月半ばに熊本を去ったと考えてよいだろう。

『船のみち』の発句の部には、鶏口を中心に、その門下、交遊圏の人々の「東都の四時の景」（鶏口序）を詠んだ句が収録されているのだが、それとは別に、南渚とともに、古練・鼎・紫篁という三人の「肥陽」の人の句が一句ずつ入っている。この三人は重賢俳諧に頻出する人たちである。重賢がなくなっても、俳諧を楽しんでいたのである。

『船のみち』より前、寛政元年（一七八九）に刊行された鶏口編『海山』第三巻には、鶏口・鶏語・南渚の三吟歌仙一巻が収録されており、第四巻には、肥後の俳人と明記して、柳径・市翁・連山・箕足・其釣の句が、熊本と明記しないで、古練・紫篁・鼎の句が、それぞれ入集している。いうまでもないことながら、『獅子眠発句集』には鶏口と熊本の関係を示す句が散見する。

細川重賢との交流から生まれた鶏口と熊本の俳人たちとの関係は、部分的には重賢没後も続き、その中心に、溝口政勝こと南渚がいたと考えて間違いはないだろう。

二　松葉文塚

熊本県立図書館に『溝口孤雲』と題された文書がある。「侯爵細川家編纂事務所」と刷られた罫紙に、中野嘉太郎が筆写した熊本の碑文集である。中に、「松葉文塚」という一編がある。以下、全文である（句読点、引用者）。

鶏口翁江都人也。号獅子眠。楼川叟養、以為嗣。於是冒谷口氏。以誹諧為業、徳修歯高文雅莫與抗者。安永中遊我藩、居五年而帰。享和壬戌七月十一日終于柳塘下木犀庵、年八十有五。既没七年、門人我輩及私淑之徒、思慕之余、相議痤翁所自著松葉集序文一編于城南安国寺、側建石、其上以為表題曰松葉文塚。使人知翁之流波。其所及者遠云。

文化戊辰秋　　　門人　　沙鴎観南渚
自在鼎維觜(ママ)

私淑之徒
竹遊　澄江　柳径　夜白　嘉女　彩石
眠兎　蘭宇　霞水　渓石　伯之　菊仙
玉斧　蘆笛　喃々　近山　五嶺　英朝
雲蝶　由之　亀十　燕子　故尋　瓦鏡
園生　　以上

文化戊辰は文化五年（一八〇八）で、碑文にある通り鶏口の七回忌にあたる。この「松葉文塚」は現存する。熊本駅近くの北岡自然公園に隣接する安国禅寺の、門を入ってすぐ左手である。高さ一メートル五十センチほど。眠った獅子の像を台石に、右の碑文が刻まれている。正面は、上部に横書きで「獅子眠先生」、中央縦書きで「松葉文塚」、向かって左の側から背面にかけて碑文、右側に「私淑之徒」の名がある。ただし、剥落しかかっていて、分明には読めない。ただ、「維觜」は実際の碑文では「雖觜」と読める。

鶏口が熊本に五年いたという碑文の内容は疑わしい。また、享年を八十五歳とするのも、『船のみち』の鶏口序を参照すれば八十二歳となり、間違っている。しかし、『ふるうちは』序文では、八十五歳でなくなったことになっている。「松葉集」は、芭蕉百回忌、楼川十三回忌を記念した『松の葉』のことだろう。『船のみち』と同じく寛政五年の鶏口序。芭蕉追善の部の「四季発句」部に南渚が四句、「文通」部に鼎が一句入集している（天理図書館綿屋文庫蔵）。とすると、松葉文塚はマツノハフミヅカと読むのが正しいのかもしれない。

鶏口門人の「自在鼎鶏觜」とは誰だろうか。『ふるうちは』では、「鶏觜」の名は、たしかに門葉の一人としてあげられている。「松葉文塚」の碑文から考えて、鶏觜もまた熊本の人であろう。「自在鼎」の名乗りから、重賢俳諧に頻出し、『海山』

や『船のみち』にも入集している「鼎」の後の俳名ではなかろうか。

南渚と鼎の熊本における つきあいを示すと思われる場面を、『続肥後先哲偉蹟』巻四「山内対鵞」の項から引いてみよう。

九峰善諧歌及画、亀井狂□来客也、一日佐田造酒助、誘九峰狂□、而訪溝口氏、詩酒交歓、於是九峰展紙写蘭、并題曰、蒼蝿乃志羅奴道安里蘭乃花、狂□感嘆不已、自後心酔殊甚、他日画工菊舎亦写蘭、乞賛於狂□、狂□録蒼蝿句於其上、且加数言曰、此是東肥山俊度所作、余於諧歌、途之人也、唯愛其有警策、因為書之

ここで、「九峰」「俊度」は山内対鵞（一七三三―一七九一）。二百石取りの熊本藩士。「亀井狂□」は狂念居士亀井南冥（一七四三―一八一四）。佐田造酒助は、佐田右州の後の名で、二百五十石取りの熊本藩士。中野嘉太郎編『細川越中守重賢公伝』に武藤氏記録を引いて記しているところによると、この佐田右州が俳名「鼎」なのである。つまりこういうことである。山内対鵞は俳諧和歌にたくみで、絵も上手な人であった。ある時、亀井南冥が熊本へ来て、対鵞の客となった。そこへ佐田造酒助こと鼎がやって来て、二人を溝口氏邸へ案内した。対鵞は、雅興のあまり、紙を広げて蘭の絵をかき、みずから「蒼蝿の知らぬ道あり蘭の花」と賛した。それを見ていた南冥は、すっかり対鵞に心酔してしまった。のち、南冥は、菊舎尼が蘭の絵をかいて賛を求めた時、「蒼蝿の」の句を書き、さらに次のように言った、「これは熊本の山内対鵞の句です。あの人とは俳諧和歌の外は付き合いはありませんが、私はあの人に時々このような作があるのが好きなので、ここに書きました」。

鼎が対鵞と南冥をつれて行った溝口氏は誰だろうか。私には、これが溝口南渚に思えてならないのである。また、佐田造酒助こと鼎が、来客中の山内家へ来て客と主人を誘った件に関しては、佐田造酒助こと鼎が、山内氏の娘（おそらくは対鵞の娘）を妻としていたという事情が関係するだろう。そのことを記す『続肥後先哲偉蹟』巻六「佐田右州」によれば、佐田右州こと鼎は、宝暦九年（一七五九）生まれ。文化十四年（一八一七）、五十九歳でなくなっている。蹴鞠が得意で、そのことをもって重賢に見出され、安永三年（一七七四）、十六歳の時に百五十石を与えられて近習となる。生涯に「江戸往復十七度」というふうに記されている。右州を造酒助に改めたのが寛政十年（一七九八）であった。

『俳諧集』における鼎の初出は、安永四年七月二十日の会で、近習になった翌年である。百韻の初裏で、執筆の「月立のぼる遠山の形」という句に、「短冊に頭陀のふくろ、行脚僧」と付けている。その後は重賢俳諧の常連となった。「松葉文塚」の鶏冠を鼎だとすると、文化五年は、鶏冠五十歳の時である。南渚は鶏冠より七歳の年長となる。ちなみに、九峰（対鳶）は『俳諧集』に登場しない。江戸へ行く機会がなかったのであろう。

しかし、以上はあくまで鶏冠を鼎と同一人とした場合の話題である。加藤定彦編『俳諧點印譜』（日本書誌学大系78、青裳堂書店）に、蝶狂眠鶏冠という人の点印譜が収録されている。『俳諧點印譜』の原本である「於之波奈嘉々美」は、文化十年前後の成立（同、解説）。前述のように、鼎は文化十四年に没している。自在鼎鶏冠と蝶狂眠鶏冠の関係についても、同一人、別人、一方が一方の継承者という三つの可能性があり（つまり何もわかっていないということ）、後考をまつしかない。

「松葉文塚」の「私淑之徒」のうち、柳径は『海山』に入集している。『俳諧集』に、澄江・彩石・喃々・菊仙・燕子・夜白・五嶺の名は見出せるが、夜白・五嶺は時代が古く、関係あるとしても、二世か三世であろう。

江戸における大名俳諧が、江戸座宗匠と藩士を結びつけ、それが大名の郷国の地に、俳諧宗匠の顕彰碑を建てることにまで至る事例が、珍しいものであるかどうかは、大名俳諧の調査がまだ十分でない状況では、わからない。つまり、今後の大名俳諧の調査においては、こういう事例も視野に入れておくことも必要であるということなのである。

三　熊本鶏口派

実態は不分明ながら、明治以降も熊本において鶏口派は継続した。『肥後先哲偉蹟』後編追加「八木田梅雄」の項に、「鶏門俳諧沿革」（未詳）からと明示して、つぎの記述がある。

熊本槨風社沿革

楳風社は、正風熊本俳壇の元祖にして、江戸の大宗匠谷口鶏口翁に出で、鶏口派と称す、我藩主霊感公（細川重賢－注）、斯翁に師事せられ、熊本に於る俳諧団結の最初とす、公の薨去後、溝口南渚宗匠、鶴田嵐生宗匠、古庄水翁宗匠、桜井蘇山宗匠、園部楳公宗匠と次第し、八木田梅雄宗匠、第八世を継承せり、之に継いで池田信止宗匠、黒川漱石宗匠となり、今日に及べり

黒川漱石は昭和三年まで生きた人である。[注] ただ、私は「熊本楳風社」についてまったく知らない。桜井蘇山、園部楳公、八木田梅雄について、『肥後先哲偉蹟』に記されたエピソードや句のいくつかを知るのみで、他の楳風社宗匠たちのことはわからない。

鶏口の木楳庵にちなんだと思われるこの熊本楳風社は、では、南渚らの勝手な鶏口俳諧継承の意識にのみよっていたのかというと、必ずしもそうではない。鶏口の名前を南渚が譲られるということがあったようなのである。そのことを記す手紙が、玉名市の俳誌「多万伊奈」三十八号（平成四年五月）に掲載されている。手紙は、谷口自言という人から溝口鼓斎という人にあてたもので、おそらく一八三〇年前後のものだと思われる。最初のあいさつと後書きを省いて、現代語に直して紹介してみよう。

先年あなたが江戸におられた時、芝原如連と一緒にあなたに初めてお目にかかってから、もう二昔余になります。今は、ご存じの通り、存義はじめ鶏口社中はみんな故人となってしまい、鶏口の連中は一人もございません。存義が生きていた頃は、あなたのお噂は時々は承りましたが、今はそのようなこともなくなり、変わり果ててしまいました。ただ、米一馬という者がいて、先年、存義の頼みによって楼川の名を与えましたが、これは遠州流の生花の師匠で、発句は下手なうえに不実者で、浅草仏参より不絶したい旨申しておりましたが、仏参もありませんでしたので、彼の家へ行って断りました。また、ご存じでしょうか、師峯という人が、折々鶏口の名をもらえるよう頼んできたこともありましたが、私の判断では、誹道不熟とみえましたので放っておきましたところ、なくなってしまいました。他流からも鶏口の名前をほしがり、頼んでくる人もおりましたが、みんな断りました。

このたび、このようなことを申し上げるのは恐れ多いことですが、存義が生きていた頃、朝夕尋ねて来ては、隙さえあれば、熊本のこと、あなたの誹道への御執心、御熟達の御様子、又は鶏口への御厚志のことなど、よく話しておりました。本当に、熊本での長年にわたるお世話、御取立てによって、誹道繁昌で壮んな御様子は承知しております。あれやこれやで、今度「柳塘下獅々眠鶏口」の名をお譲りいたしますので、今後、御書き物には、鶏口と書いていただきたく存じます。こんなことを申し上げるのも恐れ多いことですが、このまま打ち捨てておきましては、鶏口の名も埋もれ、いつか世に出ることもおぼつかないことですので、何卒、熊本において後々までも相続して、取り立てていただきたく、ひとえにお願いいたします。こういうことですので、鶏口の名前をお譲りするしるし迄に石印二顆をお送りいたします。点式は焼けてしまいましたので、熊本の方で彫っていただきたくお願いいたします。

六月十一日　　谷口自言拝

溝口婪斎様

誹名

獅子眠鶏口様

ほぼ以上のような内容である。谷口自言は鶏口の後裔であろう。南渚の別号に婪斎があったどうか、不明。しかし、手紙の内容から考えて、溝口南渚以外に考えられない。

「芝原如連」、未詳。「存義」は二世存義（泰里）のことであろう。二世存義は文政二年（一八一九）になくなっている。手紙はそれ以後のものということになる。「米一馬」は、たしかに二世楼川である。米一馬が挿花の正風遠州流の祖であったことは、前引『俳諧點印譜』の「人物注記」に指摘がある。彼に対して「不絶」とか「断」とか言っているのは、楼川の名をとり戻したということではなく、絶交したという意味である。この手紙には、窮余の一策で鶏口の名を南渚に与えて、鶏口の名だけでも消滅しないようにしたい、という意識がみえる。「師峯」は鶏口の弟子獅峯のことだと思われる。鶏口追善集『ふるうちは』に名がみえる。南渚も同席する機会があったかもしれない。獅峯の没年、未詳。南渚の鶏口への「厚志」

の中には、当然、「松葉文塚」建立のことも含まれているだろう。

熊本樨風社の継続には、以上のように、鶏口の名を譲りうけているという事情もあったのだろうと思う。ただ、鶏口の名が南渚のあとどうなったかはわからない。

熊本鶏口派宗匠の園部楳公のことは、前述のように『肥後先哲偉蹟』後編追加「園部梅公」の項に詳しいのだが、その末尾に南渚との関わりを示す記事がある。編者宇野廉の直接の取材による記事で、「園部家に芭蕉翁肖像一幅あり」と項目名を記し、杉風の描いた芭蕉肖像画を写した画のこと（眠花堂の落款、玉壺堂の印章）と、肖像の上に南渚が写した『猿蓑』の其角序があったことを記している。南渚の筆写には、「文政己丑の冬七十八歳溝口南渚写」とあった由。文政己丑は文政十二年（一八二九）である。本稿で南渚の生年を宝暦二年（一七五二）としたのはここからの逆算である。宇野廉は、さらに、この幅の裏面に、この肖像画に関する扇布あての南渚の手紙が貼布されていたといい、その手紙の全文を書きとめている。そして最後に「宛名の扇布とは誰なるか、今考ふるによし無し、梅公の筆にて、溝口孤雲殿より叟に授与之と記銘あり」と書いている。南渚の扇布あて手紙の内容は、この肖像画に『猿蓑』其角序を書きこむことの遅延をわび、漸くできたから返納する、というもの。扇布は肖像画の筆者か持主かわからないが、おそらく後者だろう。しかし、この肖像画は後に溝口家のものになった。俳諧には興味のなかった南渚の実子孤雲は、熊本鶏口派を継いでいる園部梅公に与えた。こういうことになるのだろう。しかし、この肖像画は現存しない。また、南渚はここで鶏口を名乗っていない。名前を譲られたのがこの後なのか、南渚が遠慮して使用していなかったのかは、やはりわからない。

武士層を媒介にして江戸座の俳諧が地方に拡散していくことは、ある意味で当然の道筋であるように思われる。地方に拡散していった時に江戸座の俳風はどのように変化したのか。これがもっとも知りたいところだが、現在のところ、熊本の場合は皆目わからないというのが実状である。ただ鶏口の俳風は地方でも受け入れやすかったということだけは言えそうに思う。

注

角田史方「肥後鶏口流俳壇は昭和初期迄継承されていた」（「多万伊奈」38号）。ただ、角田氏は、鶴田嵐生、古庄水翁の代を不明とされる。『肥後先哲偉蹟』後編追加「八木田梅雄」の項を見落としていたのであろう。なお、角田氏は、「何故か肥後俳諧史が語ら無い江戸座の俳壇史」（「多万伊奈」37号、平成四年）、「獅子眠鶏口を継いだ二世は肥後藩大目附役の溝口南渚であった」（「多万伊奈」40号、平成四年）で、熊本鶏口派に注意をむけている。